

I はじめに

本校は、昨年度より2カ年計画で文部科学省人権教育研究指定校となっている。児童の自尊感情をはぐくみ、友達と認め合いかわりあう力を育成するためには、昨年度取り組んだ国語科教育の研究成果を踏まえ、今年度は道徳を通して、生き方の方向や価値について言葉を通して考えさせることが有効であると考え、国立教育政策研究所・西野真由美総括研究官の指導を受けながら本研究を進めた。

II 研究の目的

平成20年度全国学力学習状況調査結果より、本校児童の課題が浮かび上がった。(資料1参照) 児童は自尊感情が低く、成就感や達成感を日ごろ味わっていない様子がうかがえる。同じ時期、校内でも人権意識アンケートをとったが、同じような質問項目で低い結果がでている。(資料2参照) その背景として、本校には、様々な要因のもと感情に任せて暴言を吐いたり暴力をふるったりする児童が多くいた。そのような児童が学級内で好き勝手に振舞い始めると、一気に学級は崩れていく。信頼関係の崩れた学級が毎年出現していた。安心して過ごせない教室では、自己成就感を味わうとか、正義を通すということはできなくなってくる。授業が成立しないという厳しい状況が毎年のように続いていた。

この子どもたちに、自分を大事にする事の尊さ、人を信じる事の喜び、人とつながることのすばらしさを味わわせたい、子どもらしく自分の力を発揮させたい。そのためには言葉で考え、言葉で自分を振り返り、言葉でつながる、そのような力をつけなければならないと考え、昨年度は、国語科を研究教科にして、コミュニケーション力、特に話す・聞く力を伸ばすことに重点をおいて取り組んだ。その結果、学習規律が身に付き、相手を見て相手に届く声で話す、相手を見てうなずきながら聞くといった技法的なことはできるようになってきた。

そこで、本年度は道徳を通して、生き方の方向や価値について言葉を通して考えさせることが有効であると考え、研究をスタートさせた。

資料1

平成21年度・22年度
文部科学省人権教育研究指定校

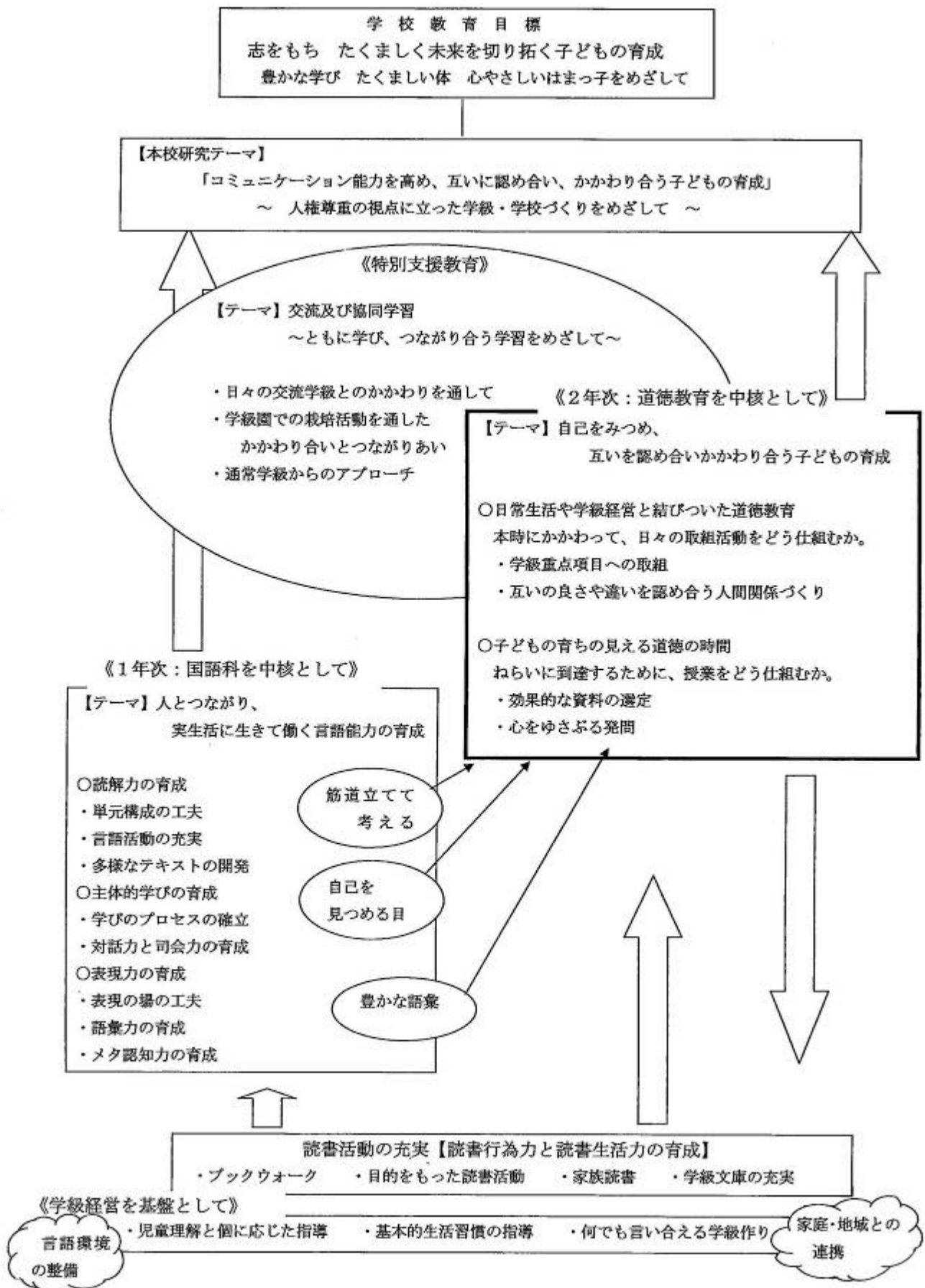
- 児童の実態(H. 20年度全国学力・学習状況調査生活習慣等に関する質問紙調査より)
【質問に対する肯定的回答が全国平均に比べて5ポイント以上低いもの】
- ・ものごとを、最後までやりとげてうれしかったことがありますか。(－8. 2)
- ・むずかしいことでも失敗をおそれないで挑戦していますか。(－9. 1)
- ・家で自分で計画を立てて勉強していますか。(－10. 9)
- ・自分にはよいところがあると思いますか。(－17. 5)

資料2

H. 20年度校内人権意識アンケートより
肯定的回答をした児童の割合(単位%)

質問項目	4年生	5年生	6年生
丁寧な言葉遣いをしようとしている。	91	70	49
教室の中で安心して自分の意見が言える。	68	68	49
悪口やいじめなどをみんなで話し合って解決したことがある。	84	51	63
自分がすきだ。	88	68	40
自分は友達に大切にされている。	83	77	77

III 研究の概要



IV 研究の内容

互いを傷つけあうような言葉が行き交う現実、友達同士の信頼関係の崩れが校内の児童にあったという実態から、2-(3)「友情・信頼」を本校の重点指導項目とした。そして、道徳教育を研究する上での視点を、二つ設けた。「子どもの育ちの見える道徳の時間」と「日常生活や学級経営と結びついた道徳教育」である。

1 「子どもの育ちの見える道徳の時間」

～道徳の時間の授業研究を中心として～

(1) 効果的な資料の選定

① 児童の実態にあった資料の選定

- ・児童が自分を重ね、素直な気持ちで考えられる資料を選ぶ。

② 前向きに考えられる資料

- ・善の心地よさをシャワーのように浴びる体験は「人に対する信頼」を深めていくのに有効な手段であるとすれば、資料においても子どもたちが暗い気持ちでざんげするものではなく、明るい将来を描きながら前向きに生きていくことができる資料、元気の出る資料が必要である。

【西野真由美先生からのアドバイス】

教師自身が資料を選んだ理由をきちんともって授業に臨むことが大事。そのためには、担任が学級を見る目を養うとともに、「学級の子どもにどうあってほしい」という願いが資料の中にあるか見極め、これと思う資料に出会うまで探していかなければならない。



6年授業風景

(児童の実態に合わせた資料選択)

主題名 信じ合う友達2-(3)

資料名 「ロレンゾの友達」

6年生になると、友情について多角的に考えられるようになる。この資料は罪を犯したかもしれない友に自首を勧めるのか、黙って逃がすのか、友としての判断が問われる話。児童は、友達の考えに耳を傾けながら「サバイユはロレンゾの気持ちを優先すべきだ。」とか「自分だったら警察に言わないだろう。」とか「ロレンゾは一生重荷を背負って生きていくことになる。

本当に助けたいと思うなら、つらくても警察に知らせる方がいいのではないか。」など、いろいろな意見を言い合い、本当の友情とはどうするべきものなのか、真剣に考えていた。

(2) ねらいにせまる発問と発表方法

① ねらいの表現を具体化

- ・ねらいを詳しく書くことで、何をねらうのか教師自身が具体的にイメージする。

② ねらう価値項目につながる中心発問

③ 子ども同士の考えを重ね合わせられる発問

・ペア対話

ねらい…自分の思いを気負いなく伝え、また友達と思いを重ね合わせることで、より深く考えさせたい。

④ 「自分だったら」と重ねて考えられる発問

- ・役割演技
- ・書くことで自己を見つめ振り返る時間

(3) 自己の変容や成長に気づける手立て

- ① 自己を振り返るための工夫
- ② 価値にせまる導入
- ③ 終末の工夫

- ・教師の説話
- ・歌を歌う

(4) 体験を取り入れる



1年授業風景（役割演技の様子）

主題名 よいとおもうことを 1－(3)

資料名 「よりみち」

役割演技を入れることで「言おうか、どうしようか。」「言うとしたら、どのように言おうか。」困っている主人公の気持ちや「言ってよかった。」という安堵の気持ちを味わわせることができた。



3年授業風景（終末の工夫）

主題名 友情を深める 2－(3)

資料名 「さとしの心」

さとしの心の変容を追いながら友達とのかかわりについて考えた後、終末は先生の呼びかけで「ともだち」の歌を歌った。歌詞を味わい、メロディーを共有し、声を合わせることの心地よさを感じ、温かい気持ちで授業を終えることができた。教師の説話で終わる以上に子どもたちにとっては、友達がいることのうれしさ、楽しさを実感できた。



2年授業風景（体験を取り入れる）

主題名 かけがえのない生命 3－(1)

資料名 ふしぎな音

自分の心臓の音を養護教諭と聞いているところ。体験を取り入れることで、生きているということを実感し、子どもたちは喜びあふれた表情をしていた。



5年授業風景（発問の工夫）

主題名 男女の協力2－（3）

資料名 言葉のおくり物

同じ資料で3回研究授業を繰り返し、ねらいに迫るためのよりよい発問を探究していった。同じ資料でも児童の実態によりねらいへの迫り方がかなり変わってきた。



4年 授業後の板書（構造的な板書）

主題名 判断を行動へ 1－（1）

資料名 どっちにしようかな

発問と関連させ、主人公の心の変容や人間関係が分かるような板書を工夫した。

2 日常生活や学級経営と結びついた道徳教育

（1）重点項目への年間を通した取組

→児童の実態、学級の変容により随時見直し

（2）互いのよさや違いを認め合う関係づくり

①何でも言うことのできる環境

②友達の意見をよく聞く習慣・友達の考えと自分の考えの相違点を明確にしながらか聞く姿勢

③聞いたことから自分の考えを組み立て、話し合いを進める力

(3) 道徳の時間と教育活動全体との関連

- ①道徳の時間に向けての種まき
- ②道徳の時間を受けて日常化へ

(4) 教室内外の環境整備

①道徳コーナーの設置

- ・各教室に道徳コーナーを設置し、既習事項を随時振り返られるようにした。

②潤いのある環境づくり

- ・校舎内外を花でいっぱいにし、潤いのある環境作りに取り組んだ。

③子どもの今を伝える掲示

- ・行事、集会活動ごとに掲示物を替えた。



4 西野真由美先生に指導していただいたこと

○学校としてのテーマを見つけ、学校として研究に取り組むこと

- ・児童の実態を把握し、内容の重点化を図る。
- ・学校で願いを共有する。→成果に結びつく。
- ・成果を見る場の設定（例：その行事で見える子どもの姿を学校で話し合う。）

○「かかわり合う」対象を広げていけないか

- ・学級内での子ども同士 → 異年齢の友達と → 保護者、地域と

○道徳の時間は楽しい時間、子どもが話せる時間

- ・道徳の時間は意見を出す時間であり、正解を出す時間ではない。
- ・信頼関係を育て、安心して意見の言い合える場（学校）に。
- ・ペア対話、グループ対話を効果的に導入し、全体対話へ。
- ・子どもの口を開かせる工夫を。

5 研究の成果と課題

【研究の成果】（資料3及び資料4参照）

- ・児童の自尊感情が伸びた。言葉を大切に日々の学級経営、友情信頼に重点を置いた道徳教育の成果である。
- ・教師の児童の実態を見取る目が養われ、即座に対応しようとする姿勢がでてきたことで、児童は安心感をもてるようになってきた。その結果、学習に向かう意欲が高まり、落ち着いて物事に取り組む姿勢が出てきた。
- ・道徳の時間にペア対話を導入したことで、自分の思いを伝えることに自信をもち、全体の場でも積極的に挙手する児童が増えてきた。
- ・児童は教室の中で安心して自分の思いを伝えられるようになってきている。友達を大切に思い、友達に学ぼうとする姿勢が育ってきた成果だ。道徳の時間には、子ども自身が自分の生き方を見つめ、それを素直に表現できるようになった。
- ・学級内でのトラブルを他人事とせず、みんなで話し合っ解決するようになった。そのことで、児童は「正義が通用する」という安心感や「話し合えば解決できる」という見通しをもつことがで

きるようになった。

【成果を踏まえての課題】

- ・ 児童は、友達と言葉でかかわる力がまだ弱い。困難に直面したとき言葉で考えたり解決したりできない児童がおり、乱暴な言葉が行き交う原因になっている。これらの児童を核にして学級経営を進め、認め合いがかかわり合う心情をさらに養っていく。
- ・ 「道徳の時間」について、多様な意見から共通点や相違点を明らかにし、ねらいにせまる授業づくりをしていくために、発問の在り方や、発表方法の工夫、板書などについてさらに研究し、授業改善を図っていく。
- ・ 「道徳の時間」にはぐくんだ心情を実践化へつなぐために、総合的な学習の時間、各教科、特別活動との関連性をより具体化し、人権教育を通じて育てたい資質を明確にした授業をしていく。
- ・ 児童のかかわりを学級内から、異学年同士、さらには地域に広げていき、かかわりあう力をさらに強めていく。そのために、地域のゲストティーチャーを有効に活用したり、情報発信を通して保護者の啓発を図ったりして、保護者・地域との連携を密にしていきたい。

資料3

質問項目2	4年生	5年生	6年生
丁寧な言葉遣いをしようとしている。	91	70	49
	95	78	92
教室の中で安心して自分の意見が言える。	68	68	49
	80	54	75
悪口やいじめなどをみんなで話し合って解決したことがある。	84	51	63
	93	76	76
自分がすきだ。	88	68	40
	92	61	69
自分は友達に大切にされている。	83	77	77
	90	86	87

資料4

<認め合いがかかわり合う力>

(H22 人権意識アンケートより)

【肯定的回答が5ポイント以上上がったもの】

- ・勉強が分からないとき友達と助け合う
- ・友達のいいところをほめることがある
- ・自分は友達に大切にされている